

# 県立広島大学コミュニケーション障害学科における 実習前プログラムの効果と課題

—学生へのアンケート調査結果より—

津田 哲也 矢守 麻奈 中村 文 小澤 由嗣

県立広島大学保健福祉学部コミュニケーション障害学科

2018年8月17日受付

2018年12月7日受理

## 抄 録

県立広島大学保健福祉学部コミュニケーション障害学科では、言語聴覚士を目指す学生が学外での臨床実習に際し、より充実した経験ができるよう、実習前プログラム内容を充実させてきた。今回、学外臨床実習を終えた学生らを対象にインターネットによるアンケートを行い、これらのプログラムの効果と課題について整理した。質問項目は実習前プログラムを振り返り、各プログラムが学外実習に効果があったかを問うものとした。この結果、多くの学生が実習前プログラムは学外実習に効果的だったと評価していることがわかった。特に、コミュニケーション障害を抱える当事者と直接的に接する機会を持つなど、臨床場面を想定した学修の有効性を実感していると示唆された。

**キーワード：**言語聴覚士，実習前教育，臨床実習

## 1 背景

言語聴覚士 (ST) の国家試験受験資格として、学内での講義や演習に加えて 480 時間以上におよぶ医療・福祉機関での実地研修 (臨床実習) が定められている<sup>1)</sup>。県立広島大学コミュニケーション障害学科 (以下、本学科) の臨床実習は、学生が実習指導者の下、学内で習得した基礎知識や技術を実際の患者に実践することを通じ、知識と必要な技能を定着させることを目的としている。

しかし近年、診療報酬の引き下げや入院期間の短縮化による医療の効率化が求められ、同時に医療の高度・多様化も著しい。このような状況のなかで、学生が臨床実習として患者と関わることで、施行するべき治療の質や量が低下するといった患者の不利益は許されず、実習生として要求される知識・技術も、年々高度化している。また、専門的知識だけではなく、患者や病院スタッフとの円滑なコミュニケーションや社会人としてのマナーについても実習前に身に付ける重要な課題である<sup>2)</sup>。

一方で、ほとんどの学生にとって高等学校までの生活で ST が対象とするコミュニケーション障害のある人と接する機会や、病院等における長期の実習は未経験である。加えて、慣れない環境への適応や、臨床家としてのふるまいも含めた高度の課題解決が求められる等への不安によって、精神的負担を感じる学生も多いと推測される<sup>3)</sup>。さらに近年は学生の学力や対人関係のあり方に変化がみられ、従来の教育方法では十分な学修が困難なケースも指摘されている<sup>4)</sup>。

本学科は、前身の広島県立保健福祉短期大学の開学から、20 年以上にわたって ST 養成を行い、現在まで約 600 名以上の卒業生を輩出してきた。本学科の歴史は言語聴覚士の国家資格化 (1997 年)、介護保険制度の開始 (2000 年) といった、社会からの要請や変化の大きい時流とともにあった。このような情勢下で、本学科は、地域社会に信頼される ST を養成するため、専門的知識・技術の定着とプロフェッショナルリズムの涵養を目指すとともに、学外臨床実習への助走となることを目的として実習までのプログラム (以下、実習前プログラム) を充実させてきた。

## 2 本学科の実習前プログラムの概要

本学科の実習前プログラムには以下の 3 つの観点がある (図 1)。

### 2.1 早期経験 early exposure

地域在住の言語障害者らを大学に招いて行う「当事者との交流会」、県内の特別支援学校、卒業生が勤務する施設への「1 日見学実習」の 2 つのプログラムが

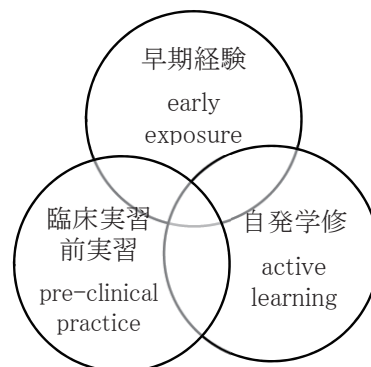


図 1 本学科の実習前プログラムの観点

ある。これらの一部は、専門課程が本格化する前に、早期経験として概論と演習に組み込んでいる。地域に住む対象者の方々と直接的に接して、コミュニケーション障害のある方の臨床像を具体的に理解し、専門職としての目的意識と学修意欲の向上を目的とする。

### 2.2 臨床実習前実習 pre-clinical practice

専門的訓練を受けた模擬患者との初回面接場面を経験し、自身のコミュニケーション能力の現状と課題を理解する「模擬患者 (SP) 演習」、仮想患者のカルテなどを教材として用い、処方から評価、訓練立案までの臨床の流れを体験する「プレ実習」、教員らが患者・家族役として初診場面のシミュレーションを行う「初診シミュレーション演習」、そして学外実習直前に行われる保健福祉学部附属診療センターでの「学内臨床実習」の 4 つのプログラムがある。

これらのプログラムは、学外実習の事前準備として専門的スキルを段階的に鍛錬する機会として設けている。

### 2.3 自発学修 active learning

上記の各プログラムについては、教員の指導下に学生の学修状況に合わせた実施計画と実施後の振り返りを行い、学生が主体的に学ぶ active learning が基本となっている。上記の各プログラムの概要を表 1 に示す。

## 3 調査の目的

本稿では、上記の実習前プログラムについて、学外実習を経験した在学生らにアンケートを実施し、その学修効果と今後の課題について明らかにすることを目的とした。

## 4 方法

### 4.1 対象

平成 29 年度 (2017 年度) に、該当年度の学外臨床実習を履修した学生 52 名 (男性 11 名、女性 41 名)。

表 1 県立広島大学コミュニケーション障害学科 実習前プログラム

プログラム	実施時期	概要
①当事者との交流会	1年後期(失語症友の会) 2年後期(聴覚障害者との交流会)	参加者に適する言語レクリエーションの準備を教員と一緒にすすめる。学生はコミュニケーションや高次脳機能に困難がある方やご家族と実際に対話し、時間を共有することを通じて言語聴覚士としての自覚と責任について考える。
②1日見学	1年後期(特別支援学校) 2年後期(先輩の職場)	県内の特別支援学校に訪問し、実際の保育や特別支援教育現場を体験する。また卒業後数年の本学科卒業生が就業する病院などの施設を学生らが訪ねる。
③模擬患者(SP)演習	2年後期	失語症、嚥下障害、認知症のある人や、小児患者の保護者などを演じる模擬患者(Simulated Patient)を対象に、2年生全員が5分間の面接場面に臨む。附属診療センターの言語訓練室を使って、本番さながらの雰囲気で行われる。 (協力:NPO法人 岡山SP研究会)。
④プレ実習	2年後期	仮想のカルテ・動画などを資料として、処方から初診、診断、治療計画と実施までの臨床の流れを確認しながら、言語聴覚療法の基本的事項を学修する。
⑤初診シミュレーション演習	2年後期(コミュニケーション障害診断法の最終試験)	ST資格を持つ教員が患者・家族・ST役となり実際の初診を模したデモンストレーションを行う。最終的には、教員が患者役となり学生がSTとして初期面談から初期診断を行う診断カテストを行う。
⑥附属診療センターでの学内臨床実習	3年前期	教員の指導下で、学内の附属診療センター外来の実習協力患者を一定期間担当し、評価・訓練・指導の過程を学ぶ。特に臨床マナーや患者・家族の方とのコミュニケーション能力の涵養を目指す。

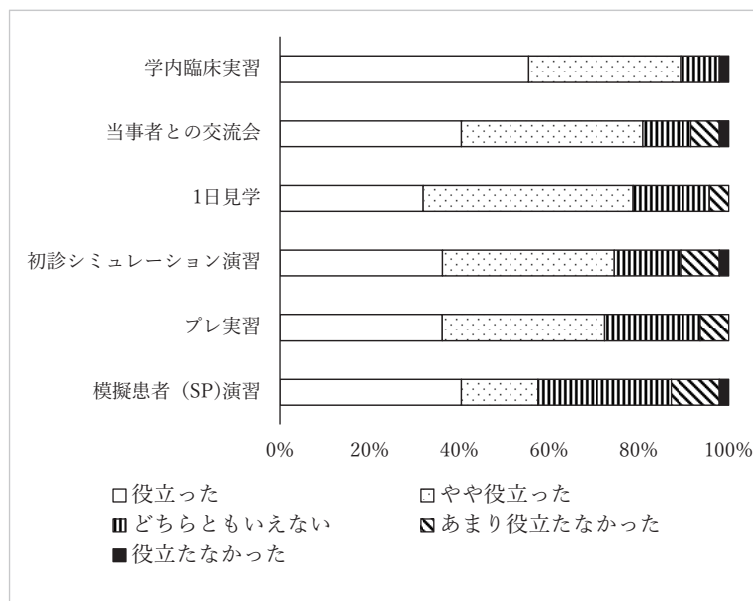


図 2 各プログラムの学外実習に対する学生の評価

## 4.2 方法

学年・性別・氏名が無記入のインターネット・アンケートにて回答の得られた47名分のデータを分析した(回収率90.4%)。調査期間は平成29年12月13日～20日の1週間とした。

アンケートの項目は、実習前プログラムのそれぞれが「どの程度、学外実習に効果があったと感じるか」を『役に立った』から『役に立たなかった』までの5件法で回答するように求めた。質問項目は以下のとおりである。Q1. 当事者との交流会(失語症・聴覚障害者の会)、Q2. 先輩の職場・特別支援学級の1日見学、Q3. 模擬患者(SP)演習、Q4. プレ実習、Q5. 初診

シミュレーション演習、Q6. 附属診療センターでの学内臨床実習、Q7. 学外実習の時期や期間、準備や講義内容について感じる事(自由記述)、Q8. 今後、臨床実習がより良くなるにはどんなことが必要または不要だと感じるか(自由記述)。以上の各項目について得られた回答を集計した。

## 5 結果

### 5.1 実習前プログラムの効果

各プログラムの効果に関する学生の回答結果を図2に示す。以下、『役に立った』と『やや役に立った』

を合わせた比率が高い順に述べる。「学内臨床実習 (89.3%)」、「当事者との交流会 (80.8%)」、「先輩の職場・特別支援学級への1日見学 (78.7%)」、「初診シミュレーション演習 (74.5%)」、「プレ実習 (72.4%)」、「模擬患者 (SP) 演習 (57.4%)」であった。

## 5.2 自由回答の分析

次に、学外臨床実習に関する自由記述項目への回答を整理する。

### 5.2.1 実習時期と期間

学外実習が行われる時期と期間については、「このままで良い」という意見は少なく(記述者 3/16名: 18.9%)、「もう少し長いほうが良い」や、「もっと短い期間でも色々な病院やSTの下で実習したい」という意見が上回っていた(記述者 8/16名: 50.0%)。

### 5.2.2 学修(講義・演習)内容・準備

学修内容・準備については、「低学年のうちから失語症友の会への参加や自分たちで企画を準備する失語症者・難聴者との交流会の機会を作っていただけであることは、とても貴重であり実習に向けたよい経験になると思う」など肯定的な意見が見られた(記述者 6/17名: 35.3%)。

また、記述者の多くが実習レポートに関する内容を回答しており、「実習日誌・ケースレポートなどはもっとしっかりと書き方を指導してほしい」や「SOAPの書き方を学べればよかった」といった改善を求める意見も見られた(記述者 4/17名: 23.5%)。

講義・演習内容は「講義資料が大変参考になった」という意見があった一方で、「講義をもっと臨床に即した内容にしてほしい」など、実習を終えて不足を感じた意見も見られた(記述者 5/17名: 29.4%)。これらは、「高次脳機能障害の講義をもっと増やしてほしい」、「もっと嚥下の授業をして欲しかった」などであった。

### 5.2.3 臨床実習をさらに充実させるための課題

今後の臨床実習をさらに充実するための課題として、もっとも意見が多かったのは「実習機会の増加(記述者 4/13名: 30.8%)」であり、次いで「大学での指導をもっと臨床的内容にしてほしい(記述者 3/13名: 23.1%)」であった。その他、「実習先の情報不足」、「実習での課題量の不均一さ」が同数見られた(記述者 2/13名: 15.3%)。

## 6 考察

多くの学生が本学科の実習前プログラムは学外実習を行うにあたり効果的だったととらえていた。特に、学生が有効と感じたのは「学内臨床実習」、「当事者との

交流会」といった実際の診療場面に近く、当事者と直接的に関わるプログラムであった。実際にSTの対象となる当事者と触れ合う機会を教育の中で適切に導入することが、学生の成長を促し、学外臨床実習への準備として有効であることが示唆された。

講義内容については「嚥下障害」や「高次脳機能障害」についての要望を認めた。この要因には、実習先はその約8割が医療機関であり、これらの症例に対面する機会が多かったためと推察される。また、高齢者数の増加の影響を受け、STの対象者にも嚥下障害や認知症が増加しているとされる<sup>3)</sup>。今後の社会的情勢に合わせたカリキュラム構成について検討を重ね、さらに充実させていく必要がある。

また、学外実習への準備では、「レポートの書き方」の指導を求める声が多かった。保健福祉学部は学内に附属診療センターを有し、本学科では学外実習前に見学実習や臨床実習を一定期間実施している。これらの機会をさらに活用して、レポート作成の指導を強化していく必要がある。

実習機会の増加を求める声や、実習の課題や内容に不均一性があることを不満に感じている意見もみられた。STが所属する診療科および急性期や回復期など実習先によって特化している専門性や対象の違いなどがあるが、現実的にはあらゆる形態の実習先で在学期間中に実習経験を積むことは困難である。学生同士の実習で得た経験の共有やその意義の徹底が課題であると思われる。

我が国はST養成校の増加により、必要な実習先を確保することが難しくなっている。この要因には、言語聴覚士の世代別の年齢構成が20～30代の若手が全体の約7割を占め、臨床経験5年以上のSTが不在である施設や、業務多忙のため実習生を受け入れられない施設がある<sup>1)</sup>ことが影響している。STの臨床実習の多くは、各施設の若手や中堅スタッフが多忙な臨床業務の傍らで時間を割くことにより支えられているのであろう。この状況の下、臨床経験が十分な指導者が在籍し、人員的にも余裕がある実習先から、初めて実習生を受け入れる施設まで経験値のバリエーションも存在すると思われる。実習指導者向けの卒後講習や実習教育の方法については、引き続き議論を続けていく必要がある。

諸外国では主要なST対象となる症例を何時間担当したかという実践事項が具体的に定められている。米国では、資格の取得後にクリニカル・フェロウシップ・イヤーと有給の研修期間が設けられ、十分な実践経験が得られる制度が定められている<sup>6-8)</sup>。さらに人口比に対するST数も日本よりはるかに充実している<sup>9)</sup>。ST養成を取り巻く背景が異なるために直接的に比較できないが、我が国の養成教育についてもこうした欧米諸国の方針も踏まえて、現実的な対応について検討

を加えていく必要がある。

臨床家を目指す学生にとって、臨床実習は養成校で学んだ専門知識や技能を実践力として身に付けるための最も貴重な機会である。臨床実習をさらに充実したものとし、実践力のある臨床家を養成し続けるためには、養成校と実習機関の連携に加え、協会の示す「臨床実習ガイドライン」の有効活用や実習指導者研修の充実が必要であろう。

本稿の一部は、平成29年度「広島県高等学校教育研究・実践合同発表会（広島市）」にて発表した。本稿に関して開示すべきCOI関係にある企業等はない。

## 7 謝 辞

本学科の臨床実習に関わっていただいた実習指導者の方々、教職員の皆様に感謝申し上げます。

## 8 文 献

- 1) 日本言語聴覚士協会 言語聴覚士養成教育モデル・コア・カリキュラム諮問委員会：言語聴覚士養成教育ガイドライン. 3-19, 2018
- 2) 日本言語聴覚士協会 言語聴覚士養成教育モデル・コア・カリキュラム諮問委員会：言語聴覚士養成教育ガイドライン・モデル・コア・カリキュラムの作成について. 言語聴覚研究, 12(3)：130-138, 2015
- 3) 石橋誠隆, 高橋謙一：実習前後における不安の変化について—新版 STAI を用いた調査. リハビリテーション教育研究, 21：82-83, 2016
- 4) 内山千鶴子：言語聴覚士養成教育ガイドライン・モデル・コア・カリキュラムの作成について—養成校および臨床実習施設を対象とした養成教育実態調査を中心として. リハビリテーション教育研究, 21：38-41, 2016
- 5) 本多留美, 綿森淑子. 認知症の人に対する言語聴覚士の関わり. 人間と科学, 7(1)：83-99, 2007
- 6) University of Toronto, Department of Speech-Language Pathology: Clinical Education Guide. University of Toronto (オンライン), 入手先 <<http://www.slp.utoronto.ca/clined/guide/>>, (参照 2018-5-30)
- 7) 吐師道子：コミュニケーション障害学科と台湾との国際交流. 人間と科学, 17(1)：113-117, 2017
- 8) 田宮愛：米国の Clinical Fellowship. 言語聴覚研究, 12(4)：281-286, 2015
- 9) 小藺真知子：言語聴覚士教育の現状と今後の課題. 保健科学研究誌, 9：1-6, 2012



# Effects and issues of pre-clinical educational programs on students' confidence during off-campus clinical practice

— A questionnaire-based study —

Tetsuya TSUDA Mana YAMORI Aya NAKAMURA Yoshiaki OZAWA

Department of Communication Sciences and Disorders, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

Received 17 August 2018

Accepted 7 December 2018

## Abstract

The Department of Communication Sciences and Disorders at the Prefectural University of Hiroshima has made efforts to improve the pre-clinical education programs for students aspiring to become speech–language and hearing pathologists. This article discusses the effects and agendas of those pre-clinical education programs. All students who underwent off-campus clinical practice were asked to complete an internet questionnaire that enquired whether they felt these programs had been effective for off-campus clinical practice. Most students responded that they believed the program had been effective for off-campus clinical practice; however, in particular, it was felt that experience of frequent contact with patients with communication disorders was the most beneficial. In conclusion, these results revealed the importance of having a practical program with real patients to prepare for off-campus clinical practice.

**Key words:** speech-language hearing pathologist, pre-clinical education, clinical practice